

山の上の生活（その4・最終回）

日本原子力研究所・理化学研究所
 大型放射光施設計画推進共同チーム
 加速器系グループ 田中 均

10. 自然のシンフォニー

新都市で生活していると、自然の壮大なパフォーマンスに驚かされることがある。11月の最後の週だったと記憶しているが、その日は朝から冷え込み、寒い一日であった。いつものようにやや遅めの昼御飯を食べ、一仕事していると、同じ部屋のDさんが興奮気味に入ってきて、「見事な虹が出ている」と教えてくれた。私達の部屋からは直接外を見ることができないので、どれ程の物かと半信半疑でリング棟の玄関に出てみて驚いた。大きな七色の半円形の帯が青空を覆っている。実物を見ないと想像できないとは思いますが、本当に、これがとてつもなく大きいのだ。視野に入る空の50%が、虹で占められていると言えば、その大きさが理解してもらえないかもしれない。リング棟の前には、中国山系の山々が広がっているが、その上に壮大な七色の帯が掛かっている景色は、まるで絵本を見ているかのようなものである。スケールと風景のすばらしさで、これを越える虹を見ることは生涯ないような気がする。撮影が失敗し、その場の光景を写真に残せなかったのが残念でならない。ちなみに、この時の空模様は、やはりキツネの嫁入り（青空であるのに小雨がばらついていて）で、しかも、雨はかなりの激しさであった。どのようにしてこのような不思議な状況が発生したのかは分からないが、この雨で、上空に水滴の巨大なプリズムが構成されたのである。

虹ほど派手ではないが、朝霧もやはり都会では味わえない自然現象の一つだ。これは、虹に比べはるかに頻繁に起こり、一冬に何回かは味わうことができる。朝霧の朝はドラマチックだ。目を覚まし、部屋のカーテンを開くと、一面真

っ白な霧が視界を遮っている。近くのテクノ中央の交差点さえ、乳白色の向こうでおぼろげにしか見えない。この時には、研究所に出所するのが楽しく、スリリングなアドベンチャーだ。当然、ゆっくり車を運転するのだが、視界が極端に悪いのでハラハラドキドキものである。まるで雲の中をドライブするTVゲームをしているようだ。

新都市の近くにある千種川でも、冬場に、しばしば朝霧が発生する。県道赤穂建部線は、千種川に沿って走っているが、中でも、国道2号線から1キロほど赤穂方面に南下した場所から見た、この時の景色は絶品だ。ゆったりと蛇行しながら流れる千種川、川面から立ち登り、まわりつづく霧、冬枯れした河川敷とそれを取り囲むなだらかで女性的な山、この風情ある自然美に出会った時は、ちょっと幸せな気分になり、思わず見とれてしまう。その雰囲気は、グラビアなどでよく見かける中国大陸の情景とも似ている。大陸のものは、これよりずっとスケールが大きいのだろう。いつの日か、そんな幽玄な風景を見に中国を訪ねてみたいものだ。



朝霧に煙るテクノ中央の交差点
 (オプトハイツから見たところ)

この他にも、朝霧の名所として佐用町の大撫山が有名である。初冬には、朝霧に覆われた山の幻想的な写真を撮ろうと多くのカメラマンが集まると聞く。こちらにも、近々、行ってみようと思っている。虹は無理でも、朝霧なら何とかかなりそうな気がする。

11. 山の上のクリスマス

山の上でも、クリスマスイブは、やはり特別な日である。オプトハイツ居残りおじさん組(自分もその一人であるが)でも、持ち寄りパーティーが企画された。ちょうどイブが日曜日だったこともあり、私は、意地でも行くまいと心に誓っていた。せっかくの聖夜をおじさん連中と飲み明かすのは、私でなくても躊躇するはずである。しかし、努力不足と日頃の行いがたたたり、結局、参加する羽目になった。他の選択肢がなかったのは言うまでもない。頼みの中国人女性研究者2名にもすっぱかさされ、持ち寄りパーティーは、予想通り、おきまりの定例飲み会となってしまった。これがいけなかったのか、部屋に帰っても全然寝付けない。「私の聖夜を返せ」という呪文が脳髄を刺激したせいであろうか... 悶々としつつ、2時過ぎまで起きていたのだが、この時点まで、雪は全く降っていなかった。平成7年、新都市のクリスマスが記録的大雪のホワイトクリスマスになるとは、その時、知る由もなかった。

25日、目覚めると、外は一面の銀世界である。雪は明け方からかなり降ったようで、新都市は、一夜のうちにスキー場のふもとの町に変貌した。この時、猛烈に発達した冬型の低気圧が裏日本を襲い、全国的に大雪を降らせていたのである。このような状況では、オプトハイツの住人といえども、研究所へ行くのは容易なことではない。チェーンを着けるぐらいならばと、思い切って、雪景色を見ながらの雪中行軍を試みた。僅か2.5キロの距離だから大したことはないというのが、そもそも間違っている。吹雪の時には、2.5キロも大変な距離なのだ。最後の上り坂で、やせ我慢も限界に達し、通行中の車に拾ってもらった。この雪で交通機関が麻痺し、研究所は午前中でクリスマスの臨時休業



雪化粧した新都市
ゴルフ場の入口付近



Spring-8 リング棟の玄関前



クリスマスの大雪の時の出勤風景
この写真からも、研究所に来る大変さが感じられる。

に追い込まれた。しかし、中には、途中で自分の車を乗り捨て、通りがかりの車に乗せてもらい、研究所までやって来た働き者もいたようである。

この日の夕方、先端科学技術支援センターでは、恒例の新都市クリスマスパーティーが開催された。大雪のため、中止されると思われていたのだが、チケットを前売りしていたために、強行されたようである。25日に降る雪も、少しであれば真にロマンティックだが、ここまで降ると迷惑になる。おかげでクリスマスパーティーは、参加者の少ない寂しいものになってしまった。それでも、ジャズコンサートは楽しくもり上がり、雪に閉じこめられた新都市の住人には、有り難いプレゼントであった。

クリスマスからの雪も、26日の午前中におさまったが、SPring-8施設周辺で50cmの積雪となる大雪であった。この雪は年を越しても残り、その後、かなり長い間、私達の目を楽しませてくれた。さて、この大雪であるが、最後に、私を思いがけないトラブルに巻き込んだのである。たまたま、軌道解析グループの忘年会が、26日に明石で行われることになっていた。雪も止み、JRも動いているというので、予定通り決行することになった。行きは何事もなく、一同、美味しいタコ懷石に舌づつみを打ち、満足して帰路についたのだが、ここから、アクシデントの第一段階が始まったのである。行きには気づかなかったが、JRの下りは、雪のためにひどく遅れていたのだ。姫路方面の新快速は到着が30分近く遅れた上に、山の手線並の混雑とのろのろ運転である。明石の料理屋を9時過ぎに出て、相生にたどり着いたのは、11時を回っていた。山の上まで帰る私とTさんは、駅前のタクシー乗り場へと急いだ。私達が待っていると、御碕タクシーの運転手が「赤穂方面に行かないか？」と声をかけてきた。「テクノまで帰るんです」と答えると、暫く考えた末に、そっちに行っても良いと言う。「テクノは雪がかなり残っているけれど、大丈夫ですか？」と訪ねたのだが、「問題はない」と一蹴された。ここで、私達は、彼の言葉を信じてしまったの

である。雪のあるところをやけに慎重に運転すると思っていたら、案の定、タイヤがノーマルだ。さらに驚いたことに、チェーンを積んでいないという。「大変だ」と思ったが、どうしようもない。車は、頑張ったあげく、美濃山トンネルの最後の上り坂でとうとう停止してしまった。ここで降ろされると、30分は雪道を歩くことになる。私達は必死で車を押した。奇跡的に車はトンネルまでたどり着いたのだが、タクシーが後輪駆動だったせいで、全身に雪を浴びてしまった。しかし、ホッとしたのも束の間、新都市の中は雪が多く、今度はタクシーが同じ道を戻れそうもないのである。どうしてタクシーの帰り道まで心配しなくてはならないのかと、腹立たしく思ったが、上りのない土郡経由の道を教え、私達はテクノ中央の交差点で車を降りた。相生からテクノまで、約1時間、通常の2倍かかった勘定である。納得できない私達は、それから2時過ぎまで、タクシーの運転手を肴にオプトハイツでやけ酒を飲んでしまった。その後、タクシーが谷に転落したという話を聞かないので、きっと無事に赤穂まで帰ったのであろう。自分の蒔いた種とはいえ、彼もきっと疲れたに違いない。やはり、冬の新都市では、チェーンは必需品である。

おわりに

最初は、大変な場所に来てしまったと落ち込んだこともあった。しかし、Think positiveの精神は、どこでも、楽しい過ごし方が見いだせることを教えてくれる。頭を切り替え、積極的に良い面を取り入れていくことで、山の上の生活も楽しく、快適なものに変えることが出来た。私の身近で起こった出来事を通し、都会では決して味わえないここでの生活の匂いを、少しでも読者の方々に伝えることが出来れば、この企画は成功である。今年は、SPring-8のコミショニングで追いまくられる日々が続くが、また機会を見つけて田舎の面白いこと、楽しいことを紹介していければ良いと思う。長い間、ご愛読ありがとうございました。

(完)